

1968年メキシコオリンピックの「光と影」

丹波 美佐子

はじめに

1968年の10月12日から10月27日までの16日間「第XIX回メキシコシティーオリンピック」が華やかに開催されました。日本は11個の金メダル、7個の銀メダル、7個の銅メダル、計25個のメダルを受賞しました。メダルの受賞数では1位がアメリカ(107個)、2位がソビエト連邦(91個)、3位が日本(25個)という快挙を成し遂げたのです。当時メキシコに住んでいた我が家は日本がメダルを獲得する度に大喜びをしたものです。

当時の我が家は毎日新聞社の拠点として使用されており、新聞記者の出入りが頻繁にありました。ある日、外出先から家に戻ると、日本の男子バレーボールチーム(銀メダル)が我が家に来ていました。母がおにぎりや日本食をたくさん作ってもてなしたことをよく覚えています。まだ高校生だった私は、男子バレーボールチーム全員のサインをもらって浮かれたものです。他にも、サッカーの試合では、メダル候補のメキシコチームを日本が破り、見事「銅メダル」を獲得した時の我々全員の興奮を忘れることができません。メキシコの新聞では「サムライ達は勇敢に戦った」と日本チームをたたえてくれていました。

メキシコオリンピックというお祭り騒ぎの数日前に起った、「トラテロルコ Tlatelolco 事件」と言う世界でも稀にみる「学生の大虐殺」があったことを忘れたかのようでした。10月2日の「トラテロルコ Tlatelolco 事件」では、300人から600人とも言われる(確かな数は現在でも不明)犠牲者を出しました。この事件はメキシコの歴史上「国家犯罪」と言う汚名を残しましたのです。学生たちを、そして学生を支持する市民を、恐怖と弾圧で沈黙させ、民主主義国家としての顔を世界に披露するこ

とで見事オリンピックを成功させたのです。当時私が通っていた高校(メキシコ国立付属第4高校)も学生の大打進とデモに参加していました。親に注意されなければ、私も学生運動に参加し、犠牲者の一人になっていたかも知れません。「トラテロルコの夜」に散っていた知人もいます。現在平和に暮らしている日本で、そして来年の東京オリンピックを目前に、自分が体験したことや聞いたこと、そして後に知ったことを書かずにはられません。

私は政治経済が専門ではありませんが、メキシコで起きた「学生運動」の真相を客観的に考え、学生運動に参加した方々の執筆を参考に、メキシコオリンピックの「光と影」の物語を綴っていきたいと思います。

歴史的背景

1960年代のメキシコを理解するには、メキシコの歴史を振り返ることにより、多少この国の政治的背景が見えてくるのではないのでしょうか。

先ずは、スペイン植民地支配からの独立戦争が勃発(1808~1822)したころの話から始めることとします。スペインの植民地社会の在り方を根本的に変えることを目指していたイダルゴ神父(1753-1811)やモレロス(1765-1815)の理念はかなわず、イツルピデ(1753-1825)が植民地支配の特権層と半封建的な社会を温存することを表明することでメキシコの独立を達成しました。しかし、その直後に君主制を樹立、皇帝となったため反逆者として処刑されます。

新生国はメキシコ連邦共和国として生まれ変わりますが、権力争いが絶えず、保守派(財産を持ち、カトリック教会を支持する)と自

由主義派（中産階級に属し、法律家や専門職を持つ自由業の人々が多い）は対立関係にありました。メキシコは混迷の時期を過ごすこととなります。

政治・経済が不安定な状態はヨーロッパ勢力の介入を招き、イギリスやフランスなどがメキシコの資源目当てに進出する事態となります。1848年には、対アメリカ戦争で敗北し、メキシコは領土の半分を奪われました。一方、フランスから莫大な借金を背負ったメキシコには、ナポレオン3世によるメキシコ征服の野望から、オーストリア・ハプスブルク家のマキシミリアン大公（1864～1867）がメキシコの君主として保守派により招かれたのです。しかし、当時メキシコの「改革運動」を推進していた自由主義派は、アメリカの資金援助を受けてフランス軍を撤退させ、マキシミリアン皇帝は処刑されてしまいます。アメリカの支援を受けたメキシコは膨大な借金を背負うことになるのです。その後、連邦政府は中央主導による国内回復をめざします。経済活性化のため、さらに外国資本を導入し、メキシコとアメリカ国境を結ぶ鉄道の建設にあたっては、アメリカとイギリスの資本導入の契約を結びました。このような政策に反発運動が起り、ディアス（Díaz）政権が誕生することとなります。

ディアスは、1876年から35年間メキシコ独裁体制の実権を握り、1911年にメキシコ革命が勃発するまで、長期安定期の大統領としての地位を固めました。ディアス政権では、独立後はじめて国土に秩序を取り戻し、目覚ましい経済発展を遂げたのです。メキシコ工業は発達し、石油資源の開発により、アメリカ合衆国やロシアに並ぶ世界三大石油生産国にしたのです。しかし、この豊かさは一部の階級にしか及ばず、先住民を含めた国民の過半数を犠牲にした経済繁栄だったのです。国民の不満を抑え込むために広域治安警察部隊と軍隊の強化が図られました。国内の反乱勢力を弾圧するため、広域治安警察部隊に強大な権限が与えられたのです。このような部隊が、後に「1968年の学生運動」の際に、学生

を苦しめることになるのです。

同時期に外国資本が導入されヨーロッパから大量の移民が入植してきました。しかし、人口の約半分をしめる先住民は無知で無能とされ、奴隷に等しい労働力として動員されたのです。メキシコ北部の鉱山開発が急速に進められるなか、日本人労働者も大量に導入されました。また、当時の榎本武揚により「榎本移民団」（コーヒー栽培目的）が、日本からメキシコの南に入植してきました。彼らは、後の「メキシコ革命と農地改革」に巻き込まれ悲惨な思いをすることは思いもしなかったでしょう。

当時のメキシコ社会では、上流階級や中間層の生活からは想像もできないほど貧しい暮らしを強いられていた階級がありました。それは奴隷同様に扱われていた農民だけではなく、都市労働者や鉱山労働者でした。長時間にわたる労働（子供も含む）、非衛生的な労働環境、低賃金、職場監督等による非人間的扱いで苦しむ一方、さらに割高な商品などを購買部で購入させられ、労働者にとっては辛い生活でした。そのためストライキが勃発し始めたのですが、治安警察部隊が出動して鎮圧され、多くの労働者が犠牲となりました。その結果、駐留する軍隊によって監視されると言う悪化した状況に陥ったのです。

ディアス独裁体制打倒の民主化運動が1910年に起こり、1940年まで続きます。20世紀初頭は、中国やロシアで帝国主義から社会変革運動が起きていました。しかし、メキシコ革命は社会主義の道を選択しませんでした。中間層を中心とする自由主義者たちの民主化運動として起こり、やがて農民や労働者を巻き込んだ革命運動へと発展したのです。社会主義勢力が決定的な役割を担うことなく、政治の安定を達成したPRI（制度的革命党）が20世紀まで一党支配体制を保持したのです。1968年の学生運動が勃発した時もPRIが政権を担っていました。

そして、メキシコでは現在も不公平な環境が続いています。根本的な社会改革を達成することができなかったのです。「メキシコ革命

は何だったのか」という疑問がいまだに議論されています。

メキシコ革命は「独裁者ディアスの再選反対運動」という政治的な動機によるものでした。当時の歴史書には多くの革命戦争に貢献した人物が登場しますが、私が特に尊敬する人物は、メキシコ人であれば誰でも知る英雄「エミリアーノ・サバタ」です。彼は革命と土地を求め、大地主が所有する大農園をなくす農地改革を主張しました。その結果、1917年の憲法には、農地改革、最低賃金、8時間労働などが法制化されたのです。サバタは暗殺されてしまいますが、後のメキシコ左翼の大統領カルデナスにより（1934～1940年）メキシコの農地改革は推進されました。

新しい時代を目指すカルデナスの改革後半は経済の低迷と社会不安に見舞われ、混乱寸前の状況に陥りました。しかし、第2次世界大戦が勃発すると、アメリカが必要とする資源と労働力の提供国となり、経済発展期を迎えることとなります。

1929年にメキシコ革命の動乱を終結させた国民革命党は、1946年には立憲革命党 PRI と名称を変え、2000年まで政権を握った一党支配の政治体制を築いたのです。PRI 政権は言論の自由を弾圧し、反政府集団のデモを武力で鎮圧したのです。

1968年の学生運動

前述に述べた歴史を振り返りみることで、なぜメキシコの学生運動が起きたのかが垣間見えてきたのではないのでしょうか。

この運動の根本をベールで隠すような政治評論が、当時のマスコミでは多く記載されていました。又、この運動に参加した人々の証言に基づいた書物や記事も多々ありますが、矛盾も多くあるのです。未だ多くの謎が残る学生運動ですが、参加した方々の客観的な供述（背景、目的、政府側の行動）などを参考にこのエッセイをまとめることとします。

近年、上記に述べた「トラルテロコ虐殺」は「国家犯罪」であったことが認知されていますが、責任者の誰も罰せられていないと言

う不快な事件なのです。

60年代は、ラテンアメリカの多くの国でゲリラ活動が活発となり、メキシコ国内でもゲリラ活動が起こっていました。キューバ革命が成功し、キューバ革命を支持する左翼グループや社会主義者たちによる政府批判も高まっていました。これに加え、ベトナム戦争反対運動が左翼グループの結成に勢力を増しました。もう一つの要因として、PRI 体制は全国各地に様々な利権集団を構え、政治家の汚職と腐敗の温床となっていたのです。私がメキシコに住んでいたころ、PRI 体制に満足している者は少なかったのですが、不思議と選挙では PRI が勝利するのです。

当時の大学ではマルクシズム思想が普及され、国立大学や国立大学付属高校等は自由に若者が答弁できる環境であり、政府の直接関与が難しい空間でした。

60年代のメキシコでは左翼グループ指導の下、学生運動が数十回起きていたのですが、機動隊や警察官出動により鎮圧されていました。政府軍はゲリラ活動撲滅作戦を展開し、左翼勢力への監視と締め付けが強化されました。このような前例もあり、反政府感情が学生や中間層に浸透していたのです。

メキシコの高等教育機関は、大きく分けてメキシコ国立自治大学 UNAM（付属高校も含む）と工科大学 Politécnico（付属職業学校も含む）があります。しばしばこの二つの学生間にもめ事がありました。

6月23日に高校生の間で些細なことで喧嘩があり、そこへ警察機動隊（granaderos）がこん棒と銃剣で干渉してきたのです。凶悪の中だった高校生（preparatoria）と職業訓練（vocacional）の学生達が団結して機動隊に抵抗し、大騒動になってしまったのです。

6月26日に、警察機動隊の解体を要求するデモ行進が発生したのです。この日はもう一つのデモが計画されていました。それはキューバの反パティスタ戦開始を記念する日でもありました。学生は「警察機動隊はメキシコの恥である」などと書かれたポスターや、「チェ・ゲバラ」の写真を掲げた旗を持ち、メキシ

コ中心街を何百人もの若者が行進しました。左翼団体や右翼団体に交じって、不良学生などもこれとばかりに参加していたのです。彼らを待ち受けていたのは銃剣を持った機動隊と警察官でした。若者は石や瓶を持って立ち向かっていきましたが機動隊の銃剣には敵わなかったのです、そこで近くの自治大学第一付属高校 San Ildefonso (18 世紀の由緒ある建造物) に逃げ込み何日も戦いを繰り広げました。

6月29日には政府の司法長官、市長、内務大臣エチエベリア (Echeverria、後の大統領)、市長、防衛大臣の会議が行われ、軍隊を出動させる決定がくだされました。自治大学付属高校を武力で占領し、400 人もの負傷者を出したと言われていました。次に起こる騒動の始まりでした。学生たちは他の教育施設に逃げ込み、機動隊や軍隊を相手に攻撃を繰り広げたのです。

私は、当時何が起こっているのかよくわかりませんでしたが、学内は騒がしく、通っていた国立大学付属第 4 高校に、突如顔を見たこともないリーダー (あだ名がチャパロ、ちび) が現れ、熱く演説し集会を開いていました。私も友達に誘われ集会に参加していたのです。ある日、機動隊がやってきて、厚い鉄の門に向かって銃を放ったのです。現在もその門には機関銃で撃たれた跡が残っています。

我々女子はトイレに逃げ込みました。天井が低かったのでレンガの壁をよじ登り、わずかな隙間から隣の空き地へ飛び下り逃げることができました。その後、学内で集会を開いていたチャパロリーダーが連行されたことを知りました。

私は親に「絶対にミーティングに行っちゃいけない」「ピラ配りもしてはいけない」と強く言われました。もし外国人である我々が反政府運動に関与したら「国外追放」になるからです。国立大学も高校もストライキに入り、学校は閉鎖され、友達に会う機会もなくなりました。そしてオリンピックを迎えたのです。

政府やマスコミは若者たちを「悪しき集団」「左翼グループに操られている」と非難しま

した。反政府運動のデモは拡大していきました。自治大学付属高校や工業大学などへ逃げ込む学生は片端から捕らえられ、政治犯として投獄されました。次々と自治大学付属高校が占領されたことにより、国立自治大学全体のストライキが宣言されました。他の大学 (私立大学や地方の大学等) も次第にストライキに加わるようになりました。

当時の UNAM (メキシコ国立自治大学) の総長ハビエル・パロス・シエラ (Javier Barros Sierra) は、自治大学所属高校の軍隊侵入に対する抗議デモを行いました。10 万人もの学生や教員、そして市民も加わった「平和的行進」でした。節度ある静かなデモ「沈黙の行進」として現在でも知られています。軍隊との衝突もありませんでした。反政府のデモ参加者は、「直ちに軍隊を校内から撤退」「自治権の尊重」「政治犯扱いの学生の開放」「メキシコ国民の言論の自由の尊重」「武力での弾圧行為を辞める」などを求めています。

この行進をきっかけに、メキシコ国立自治大学キャンパス (UNAM) で反政府弁論のための集会が実行されるようになります。大学内で CNH (全国ストライキ審議会) が中心となり熱い答弁が交されたのです。

当時のメキシコ大統領はグスタボ・ディアス・オルダス (Gustavo Díaz Ordaz: 1964 年～1970 年) でした。1968 年の 10 月に実施されるオリンピックを成功させるには、UNAM での集会は PRI 政権を脅かす危険な集団だったのです。これまでも PRI 体制は言論の自由を弾圧し、ゲリラ撲滅作戦を展開し、左翼勢力への監視と締め付けを強化していました。反政府運動の主導者たちを捕らえようと、軍隊が UNAM に侵入して占領してしまったのです。しかし、CNH の主導者は大勢いて、当時の参加者の証言によると、200 人を超えていたと言われています。交代に主導権を持ち、一人が捕えられてもまた次のリーダーが現れるのです。

軍隊侵略のもう一つの理由として、UNAM (通常 Ciudad Universitaria 大学都市) 内にある競技場はオリンピックの開会式と閉会式が行わ

れる予定の場所でした。オリンピックを成功させるためには UNAM での集会は危険であり、直ちにこの騒動を終結させたかったのです。

自治大学都市までもが自治と言う権利を侵害されてしまった結果、パロス・シエラ総長は辞任に追い込まれます。CNH の要求は以上に挙げた項目に加え、公の場で政府側との話し合いを求めています。オリンピックをポイコットする意思はなかったのです。

このような CNH の要望に全く応じようとする政府に対して、市民も交えての抑えきれない反政府感情が拡大していったのです。UNAM が軍隊に占領され、集会の場を失った学生達はトラテロルコにある 3 文化広場に集まり、CNH 主導のもと集会と演説を実施しようとしていました。それは 10 月 2 日の夜に予定されていました。それが「悪夢のトラテロルコ大虐殺」を招いたのです。我々普通の学生は危険を伴うので 3 文化広場へは行かないようにと言われていました。しかし、メキシコの民主化を求める多くの若者が参加したのです。そこで何が起きたのでしょうか、どのようにしてこのような国家主導の大虐殺が生じたのでしょうか。

トラテロルコでの悲劇

アグアヨ・セルヒオが、緻密な研究と証拠となる資料を参考に、2018 年に本を出版しました。これによると、アメリカの CIA の関与があったことを示唆しています。1958 年に CIA のメキシコ支部代表スコット・ウインストン (Winston Scott) とメキシコの政府機関との互いの協力が始まりました。特に、キューバ革命後メキシコはアメリカにとって重要な拠点となったのです。スコット氏はそれから 13 年間メキシコ政府の権力者から特別な優遇を得ることとなり、また当時のメキシコ権力者に対しての影響も拡大していきました。CIA メキシコ支部の局長は、普通は 4 年交代のところ、スコット氏は 13 年間も局長の座に居座ったのです。メキシコ CIA 支部は、ワシントンから高く評価されていました。CIA のアメリカ人

幹部が 50 人とメキシコ人情報提供者が 200 人いたとされています。スコットが生み出した LITEMPO 企画によると、14 人の大物政治家(元大統領や安全保障幹部等)の名前が連なり、彼らは CIA の賃金台帳の名簿に名前が載っていたと言う事実があります、すなわち、金額は確かではありませんが CIA からの支払いがなされていたのです。尚、DIAZ ORDAZ 大統領選挙のときは CIA が金銭的な支援を与えていたのです。DIAZ ORDAZ 大統領と CIA のスコットの関係は深く、両者とも反共主義者でした。68 年の学生運動を共産主義団体(キューバ、ソビエト等)の陰謀であると国民に思い込ませ、学生弾圧を正当化したのです。そして、トラテロルコの夜に起きた大虐殺事件は「学生運動指導者」に責任があると言い逃れをしたのです。オリンピック開催直前である 10 月 2 日の 3 文化広場での集会を政府は許せなかったのです。

2 日当日、オリンピックを成功させるため「オリンピック部隊」が創設されていました。この部隊の一部はトラテロルコ広場を囲む建物(チワワ棟)に潜んでいました。そこから襲撃を始め主なリーダーたちを捕らえる計画だったのです。学生集会の演説のために用意されていたマイクが設置されていた同じ建物でした。まずは、広場の西側から軍隊が広場に侵入し、集団を立ち退かせ、そこへオリンピック部隊が治安部隊や機動隊と共にリーダーや活動家を捕らえ、一斉に集会に割り込む予定でした。何としてもこの運動を鎮圧するためあらゆる手段で「学生運動を針圧せよ」との大統領命令がくだされていたのです。集まった人々の間には私服の軍人が混じっていると噂がありました。

演説が始まって間もない 6 時ごろに、攻撃開始の合図とともに治安部隊と軍隊の銃撃が始まりました。しかし、突如近隣のビルから狙撃銃が放たれたのです。広場は混乱に陥りました。集会参加者をターゲットにあらゆる方角から銃弾が飛び散り、あっという間に血の海になったのです。そこにはビルに住む住民もいました。リーダーたちは片端から捕ら

えられました。近隣住宅に逃げ込んだ者もいましたが、操作の手は普通の市民の家にまで忍び寄ったのです。学生運動はついに「悲劇の夜」を迎えてしまったのです。CIA が関与していたことも現在では明らかになってきました。しかし当時の政府側の責任者は誰も罰せられていないのが事実です。

新聞記者の通訳をしていた姉は、10月3日に「トラルテロルコ」を訪れました。目を背けたくなるような光景だったと語ってくれました。言葉では言い表せないショックを、私も、姉も、そして多くのメキシコ国民も受けました。

しかし、12日には、何事もなかったかのようにオリンピックは開幕され、国民も報道陣もオリンピックのお祭り騒ぎに引き寄せられ

たのです。27日には閉会式が無事実施されました。多くの学生を犠牲にした「メキシコシティオリンピック」は成功したのです。

私は、新聞記者に連れられ「東洋の魔女」と言われた女子バレーボールの試合を観ることが出来ましたし、「第 XIX 回メキシコシティオリンピック」の閉会式を確かにこの目で観たのですが、あまりの人だかりに私は只々目が回り、あまり記憶に残っていません。

最後に言えることは、男子バレーボール選手の書いてくれたサインを、未だ宝物のように引き出しに閉まっています。そして 68 年の学生運動は、とても悲しい出来事として心の奥に刻まれています。

参考文献

- Aguayo, Sergio, "El 68: los estudiantes, el presidente y la CIA", ediciones Proceso, 2018.
Gómez, Pablo, "1968: La historia también está hecha de derrotas", editorial Porrúa, 2008.
Íñigo Fernández, "Historia de México", editorial Pearson, 1999.
国本伊代『メキシコの歴史』新評論、2002年。

(丹波美佐子、本学非常勤講師)